

4. 図書紹介：Robert Pruter 著

『The Rise of American High School Sports and the Search for Control, 1880–1930』

中澤 篤史

はじめに

本書は、1880年から1930年にかけてのアメリカ合衆国の高校運動部活動の歴史的展開を記述した学術書である。著者のRobert Pruter氏は、イリノイ州にあるルイス大学の図書館員であり、著書に*Chicago Soul*, University of Illinois Press, 1991. や *Doowop: The Chicago Scene*, University of Illinois Press, 1996. がある。

アメリカ合衆国の運動部活動の歴史に関する先行研究を概観すると、Riess, S. A., *Sport in industrial America 1850-1920*, Harlan Davidson, 1995. や Rader, B. G., *American Sports* (3rd edition), A Simon & Schuster Company, 1996. などが通史研究の一部として描いてはいるが、詳細な個別史の蓄積は十分とはいえなかった。そうした中で、Bundgaard, A., *Muscle and Manliness: The rise of Sport in American Boarding Schools*, Syracuse University Press, 2005. は19世紀の展開を詳細に記述した。本書は、その成果を引き継いで、アメリカ高校運動部活動の19世紀終わりから20世紀始まりへの展開を跡づけようとする三部14章で構成される大著である。

ここでは、本書の内容を要約的に紹介し、いくつかの寸評を添える。

Preface

アメリカ合衆国の高校運動部活動は19世紀後半に本格的に発展して以来、その教育システムの大きな役割を担ってきた。アメリカの教師は、高校運動部活動が良い生徒、良い人間、良いアメリカ人を育成すると、その価値——スポーツマンシップ・チームワーク・ルールの遵守・勇気・リー

ダーシップ・民主主義的心性・善悪の感性——を信じてきた。他方で、高校運動部活動は、過熱化の問題など、教育的な価値を破壊させる側面も持ち合わせていた。本書の目的は、スポーツの教育的価値とそれを壊しうる負の側面との相克の中で、アメリカの教師が高校運動部活動システムをどのように発展させたのかを明らかにすることである。そのための分析枠組みとして、3つの時期区分が設定される。

①1880年～1900年：生徒の先導と大人の協調 (Student Initiative and Adult Alliances)。生徒の強い先導があった時代であり、スポーツが高校に導入され定着したが、その背景には学校外の大人・クラブ・大学による施設面や金銭面の支援と協調があった時代である。この時代が本書の〔第一部〕となる。

②1900年～1920年：制度的統制の確立 (Establishment of Institutional Control)。教師が高校運動部活動の統制に乗り出した時代であり、学校間対抗スポーツの問題を解決するために、学校レベル・地域レベル・州レベルで制度的な統制下に置こうとした時代である。これが本書の〔第二部〕となる。

③1920年～1930年：国家的統治の勝利 (Triumph of National Governance)。学校間対抗スポーツが国レベルの現象となり、州立高校運動部活動協会の全米連合の管理下に入った時代であり、大学やクラブを高校スポーツの世界から排除した時代である。学校間対抗スポーツの基本的構造は、この1930年にできあがった。これが本書の〔第三部〕となる。

本書の分析対象はアメリカ全体に及ぶが、とくにシカゴ市とイリノイ州の事例に重点を置いてい

る。シカゴ市の高校運動部活動の発展は、19世紀における好例であり、20世紀に入ってからシカゴ市は国レベルの高校スポーツ競技会を数多く開催し、注目されてきた。そしてイリノイ州は州立高校運動部活動協会の全米連合が形成される時、その大きな役割を担った。高校運動部活動の歴史の中で重要な位置にあったこのシカゴ市とイリノイ州を中心事例にして、分析が進められる。

[Part One: Student Initiative and Adult Alliances, 1880–1900]

1. Baseball and Football Pioneer High School Sports

高校運動部活動は、19世紀前半にアメリカ東部の私立の寄宿学校で始まった。それらは学校のカリキュラムではなく、休憩時間や学校外の時間に、学校の教師ではなく学外の大学生を指導者として生じた。南北戦争（1861-1865）が終わると、野球が盛んになり、多くの寄宿学校で、生徒は、学校間対抗スポーツを支援する競技団体やクラブを組織した。男子生徒がその責任を担う一方で、学校当局は運動場を整備することで支援した。私立の寄宿学校は、アメリカの公立学校の学校間対抗スポーツを発展させる筋道をつけた。1890年代に中等教育システムが大きく変化し、公立高校が劇的に増え、公立学校での学校間対抗スポーツも大きく発展した。高校運動部活動における学校間対抗スポーツは、1870年代から1880年代に、野球とアメリカンフットボールを先駆者として始まった。こうした初期の生徒主導の学校間対抗スポーツは、スポーツマンシップやフェアプレイという観点から問題があったが、教師は注意を払わず、まだそれを統制しようとはしなかった。

2. The Rise of Schoolboy Track and Tennis

1890年代に学校間対抗スポーツは爆発的な発展を遂げた。その学校間対抗スポーツ発展の中心は、陸上競技とテニスであった。生徒は、スポー

ツ連盟をつくり運営したが、それは施設面や事務面での大人の支援無しでは不可能であった。当時、大学やアマチュアクラブによる規則は無かったが、後にそうした規則が決められ始めた。

3. The Physical Education Movement and the Campaign for Control

1880年から1900年までは、アメリカの学校間対抗スポーツは生徒の主導にあった。1900年代になると、教育改革者が運動部活動を、体育カリキュラムの一部にするために管理下に置いた。高校の体育改革者は大学の例に従って、「運動競技は教育に役立つ」というキャッチフレーズとともに、スポーツプログラムを引き継いだ。その改革は、進歩主義時代におけるアメリカの教育全体と社会全体の改革にも通じるものであった。改革の背景には、若者のスポーツが、特に都市部において、近代産業社会の病理を改善するという進歩主義時代の価値観や、それとも関連したキリスト教青年会（YMCA: Young Men's Christian Association）の台頭やプレイグラウンド運動（Playground Movement）があった。そうして高校運動部活動は、良い人格や市民性を育成し、若者の非行を防止し、健康を害するスラムのありさまに対抗するための手段と見なされた。加えて、当局は、教育を大衆化させ、労働者階級や移民に初等・中等教育を与えて社会を変えようと、1898年から1908年にかけて、今日のアメリカの高校を形づくる3つの大きな教育改革を行った。第1の改革は、高校を、中・上流階級向けの大学準備学校から、すべてのアメリカ人が通うべき教育機関へと変えたこと。第2の改革は、学校管理者が、それまで生徒主導であった運動部活動を、管理し始めたこと。第3の改革は、高校の教師が、生徒のインフォーマル組織を廃止し、課外活動を統制したことであった。これら3つの改革は互いに関連しつつ、教師がスポーツを統制し、公立高校の文化が進歩主義時代の価値観を反映しながら作り替えられた。

[Part Two: Establishment of Institutional Control, 1900–1920]

4. Educators Impose Institutional Control

多くの地域で、教師主導の高校スポーツ連盟が設立された。その目的は、陸上競技やバスケットボールの大会を支援するためであった。たとえば、ニューヨークでは、1903年に公立学校運動競技連盟（PSAL: Public School Athletic League）が設立された。教育機関の管理下にある連盟の設立は、学校間対抗スポーツに教師による指導と規制を押しつけるものだった。しかし、教師による管理はすぐに実現したわけではなかった。連盟は、高校運動部活動の悪習や生徒の抵抗に直面した。人格形成やアメリカ社会の民主主義的価値のために高校スポーツを統制しようとする教師の目論見は、すぐさま完全には実現しなかった。

5. Student Resistance to Control and Reform

高校当局は、課外活動が生徒によるインフォーマルな友愛会（fraternity and sorority）を基盤とした秘密結社（secret society）によって牛耳られていることに気づいた。秘密結社は、エリート主義を真似た社交目的の集まりであり、パーティーやダンス、ディナーを開催したりしていた。当局は、それらが非民主的な性格と持つと見なし、批判した。学校当局は、第一次世界大戦までに友愛会を弾圧し、高校運動部活動を管理下に置いた。こうしてアメリカの公立高校から友愛会が消滅し、生徒主導の運動部活動は終焉を迎えた。学校間対抗スポーツは、今や、生徒のつながりをつくり、人格を形成し、より良い市民性を育成するという、教師の目的に沿って行われることになった。ただし、統制の追求が終わりを迎えたわけではなかった。国レベルの学校間対抗スポーツは未だ改革途上にあっし、新しいスポーツ種目の誕生や学校外のスポーツ団体との関係などが問題となってきた。

6. Winter Indoor Sports Fill the Void

1890年代における高校での体育館の建設は、とくにバスケットボールなど、インドアスポーツの発展の基礎となった。教師は体育をアメリカの高校生の発達にとって本質的なものと見ていた。体育館は、元々、体操のためにつくられていたが、屋内野球など新しい種目も行われるようになり、教師はそこに教育的価値を見出した。そうした新しいインドアスポーツが、年間のスポーツカレンダーの隙間を埋めるように、高校で誕生した。体育部局が発展させてきた体操のルーティーンは、高校生にとって魅力的ではなく、高校生は自然な本質的欲求に従ってスポーツを楽しもうとした。インドアスポーツが中等学校に普及するには、制度的な支援が必要であった。その支援は、インドアスポーツの世界にいる先達によって行われた。なぜなら、そのインドアスポーツを保持するためだけでなく、上達した選手をそのインドアスポーツに引き込むために、若い世代を訓練したかったからである。教師は、こうした冬のインドアスポーツが体操よりも人格形成に役立つと好意的に見ていた。ただし、キリスト教青年会・クラブ・大学など、学外からの施設提供などの支援が無視できないほど大きくなってきたので、教師は、高校運動部活動に対する自分たちの管理が浸食されていると気づいた。

7. New Outdoor Sports Advance the Educational Mission

インドアスポーツが退屈な身体運動に代わって導入される一方で、新しいアウトドアスポーツが導入された。たとえばサッカーが、野蛮なアメリカンフットボールに代わるスポーツとして、教師によって導入された。運動部活動の広がりや、スポーツの利点が学校全体へ広がってきたことを意味していた。その利点とは、身体的・人格的な発達であり、高校の教育目標に適したものであり、社会全体を底上げする進歩主義の考えにも適したものであった。中等学校における新しいアウトド

アスポートの発展に共通していることは、教師からの反対が無かったことである。それらは、学校の教育目標に合致していると考えられた。多くの場合、教師は率先して新しいスポーツ——サッカー・ゴルフ・漕艇・ラクロス——を導入し、生徒に参加を促した。ただし、これら多くの新しいスポーツには学外からの大きな支援があり、それをどう統制するかが1920年代に問題となった。

8. The New Athletic Girl and Interscholastic Sports

20世紀に入ると、多くの女性が労働者として働くようになり、教育そしてスポーツにおいても女子の扱いが問題となってきた。民間スポーツクラブ・企業チーム・教会リーグ・寮プログラムが整備されて、エリートから労働者階級に至るまで、スポーツは人々にとって身近な存在になった。それは公立・私立学校、とくに中等学校でも同様だった。それによって医療機関や教育機関の人々は、男性だけでなく女性にとっても、健康のために身体活動は必要だと気づくようになった。教師や都市改革者は、遊ぶ時間や運動が、不健康そうに見える労働者階級のモダンガールに必要なだと主張した。学校は、新しく登場したアスレチックガール (athletic girl) に体操を提供するだけでなく、スポーツ活動、とくに屋内野球・バスケットボール・陸上競技に参加させた。しかし教師は、スポーツは彼女たちを楽しませると感じつつも、一方で男性性を助長させ女性らしさを損なわせるかもしれないとも危惧した。実際、医師の中には、スポーツのストレスが子どもを産む女性には有害であるから反対する者もいた。アスレチックガールは、アメリカ人男性の将来の妻となるような慎み深い女性的な存在ではなかった。女子が男子ルールでスポーツをすることに対して、教師は、男女の生物学的・感情的な違いが考慮されていないと問題視し、男女別の方法が必要と感じた。第一次世界大戦頃になると、多くの地域で女子スポーツは節度を保つように管理され、競技会は行われなくな

った。教師によるスポーツの統制は、男子の場合よりも女子の場合に首尾良く進んだが、1920年代になると再びその問題が浮上した。女子スポーツの熱気が再び高まり、統制を巡る闘争が生じたのである。

[Part Three: Triumph of National Governance, 1920–1930]

9. Interscholastics and the Golden Age of Sports

1920年代は、スポーツの黄金時代であった。高校・大学・アマチュア・マイナーリーグ・メジャーリーグのすべての競技段階で、興味関心は高まり、商業的に拡大した。大学やプロに対抗するように、学校間対抗スポーツは、対象と規模を広げて、それにつれて高校はますます多くの学生選手を支援し、多くのスポーツ種目やより大きな大会を提供するようになった。学校間対抗スポーツが成長するということは、スポーツをする生徒が増加するということでもあった。当時、児童・青少年の労働規制なども背景にしながら、高校は、多くの州で義務制が敷かれ、多くの多様な生徒が通うようになっていた。高校は、もはや中等教育の標準的組織と見なされ、すべての子どもに道徳心や共通の価値観を植えつける役割が期待された。それを実現するための手段として、当局は、学校間対抗スポーツを推奨した。当時、ほとんどの学校で、アメリカンフットボール・野球・バスケットボール・陸上競技の人気種目が行われ、多くの高校で競技大会の範囲も拡大され、州チャンピオンを集めたよりハイレベルな大会が開催されるようになった。同時に、大学が高校スポーツ大会を後援するようになり、地域レベルから国レベルの大会に至るまで、商業主義は進んでいった。商業主義によって、高校スポーツのヒーローに過度な注目が集まり、シーズン後には遠征旅行が組まれ、高校スポーツは、教師が期待するような教育的価値の実現と相容れなくなってきた。教師は、商業

主義が、高校生に極度の緊張を強いたり、あるいは慢心させたりして、スポーツの教育的意味を見失わせるといった。

10. Creation of Military Sports in the Secondary Schools

アメリカが第一次世界大戦に突入してから、戦争準備という意味合いで、中等学校に軍事スポーツが入り込んできた。戦時中、高校では大学と同様に、射撃術や体力向上だけでなく、教練や閲兵が行われた。これらは、将来の兵隊となる生徒に、規律と従順さを植えつけようとするものであった。軍事スポーツはほとんどの中等学校で導入され、1920年代まで続いた。不干渉政策をとり、武装解除し、戦争反対の機運が盛り上がる中で、戦争のための準備をするという矛盾を抱えながら、軍事スポーツは続いた。軍事訓練は、教師や世間から支持を受けていたが、女子にも行わせることには反対された。教練や閲兵を行う学校では、課外活動として、フェンシング・射撃・ポロといった軍事スポーツも行われた。国家の学校システムが少なくとも男子に限っては軍事訓練を受け入れた。多くのアメリカ人は、こうした軍事訓練の台頭に軍国主義の危険性を感じたが、第一次世界大戦の経験と恐怖は、高校で戦争準備を行うことを認めさせた。多くの地域で、軍事スポーツが第一次世界大戦後に根付き、多くのアメリカ人は軍事スポーツに価値や必要性を認めるだけでなく、それが人格を形成し民主主義的な価値も植えつけると見なすようにもなった。軍事訓練や軍事スポーツが教育的にも役立つという見方は、少なくともベトナム戦争までは、教師にとって真理となった。

11. The Private and Catholic Schools' Parallel World of Interscholastic Sports

1920年代に、公立学校が学校間対抗スポーツを広めていったとき、それは私立学校や宗教学校にとってのモデルにもなった。公立学校と同じように、私立学校や宗教学校の教師は、スポーツを生

徒の倫理的発達に役立つと見なした。しかし私立学校は、公立学校のような連盟や高度な組織を持っていなかった。ただし、私立の寄宿学校は潤沢な資金とエリート同士のつながりがあったので、公立学校以上に、漕艇なゴルフなどの種目が盛んになり、独自の競技大会もつくられた。もっとも大きな私立学校グループであったカトリック系学校は、労働者階級の移民を生徒に抱えながら、アメリカンフットボールなどの人気種目を提供したが、連盟や競技大会の設立は公立学校よりも遅れた。カトリック系学校が学校間対抗スポーツを取り入れた理由は、生徒をアメリカ国民化させるためであった。

12. Girls' Interscholastic Sports and the Exuberance to Compete

女子にとっての学校間対抗スポーツは、1920年代の社会問題の1つだった。地域教育委員会や州立高校運動部活動協会は、女子のスポーツ参加の賛否を巡って、振り回されていた。一方で、オリンピックや国レベルの大会に参加するような女子選手の爆発的増加があったため、女子の学校間対抗スポーツへの参加は促された。もう一方で、女子体育の指導者からは、女性性への危険が懸念され、女子スポーツを制限しようとする動きがあった。それらの妥協点としての結末は、教師の管理の下で、女子スポーツを節度を保って行うことであった。そこで想定されているのは、勝利ではなく娯楽を目的として節度を保ったクラス間対抗競技を楽しむ女子の姿であり、わめき散らす群衆の前でスポーツをすることはなく、見せ物となることもない女子スポーツのあり方であった。1920年代末までに女子の学校間対抗スポーツは縮小され、多くの州で、それまで行われていたバスケットボール大会が行われなくなった。その後、予算削減の嵐に向き合うことになった高校運動部活動は、スポーツ支援のあり方を見直す必要に迫られ、とくに女子のプログラムを縮小した。1970年代初頭になると、いわゆるタイトルIXの影響から、女

子の学校間対抗スポーツは復活し、女子は高校運動部活動に参加する完全な機会を享受するようになった。

13. The Separate and Unequal World of African American Interscholastic Sports

アフリカ系アメリカ人の高校運動部活動は1920年代に盛んになった。最南部では、黒人高校は隔離され貧困にあえいでいたため、スポーツ施設が不足し、運動部活動の発達は遅れていた。北部や西部では、黒人は統合学校に通いながら、学校間対抗スポーツを経験した。教師は、アフリカ系アメリカ人の子どもに運動部活動を通して、健康や人格を形成するだけでなく、白人社会からの日常的な差別や偏見のまなざしに耐えるような精神的・身体的な強さを身につけさせようとした。差別や隔離に苦しめられた黒人学校は、独自の学校間対抗スポーツ競技をつくりあげて余儀なくされた。不十分な資源と未発達な教育システムを組み合わせながら、北部・南部両方で、独自の学校間対抗スポーツの世界を男女ともにつくりあげること成功し、限られた資源の範囲で、白人世界と同じような学校プログラム、地域大会、州大会、全米大会を提供した。アフリカ系アメリカ人の学校間対抗スポーツは、主流派社会のそれとは別に行われ、同等ではなく、互いに交わることはなかったが、誇りを持って行われていた。

14. New National Governance and the Triumph of the State High School Associations

1920年代における学校間対抗スポーツの国家規模での拡大は、多くのスポーツファンを沸かせ、大観衆を高校スポーツに引きつけた。1900年代初頭から続いた、大学の支援に基づく高校スポーツシステムは変化した。その変化の基盤には、州立高校運動部活動協会（State High School Athletic Association）が各州で出現したことと、それらの国家規模での組織体制である全米連合（National Federation of State High School Athletic

Association）が確立されたことがあった。それらの共通した目的はすべての高校スポーツを管理し、大学を高校スポーツ界から追放することであった。大学の後援は過剰な商業主義を生みだし、生徒を酷使していた。コーチや生徒集団、地域住民、新聞などからの勝利至上主義のプレッシャーによって、年齢や成績の出場資格が破られ、学業が疎かにされ、スター選手が祭り上げられ、スポーツマンシップが蔑ろにされ、スケジュールが過密になっていた。高校スポーツにとってもっとも重要だったはずの人格形成要素は、こうした商業主義によって、侵害されていた。1929年に州立高校運動部活動協会の全米連合は、州をまたぐバスケットボール大会を許可しない決定を下し、それに従って1930年に大学は後援大会を中止した。こうして1930年代初頭に、教師は、高校スポーツから大学・クラブを追放し、長い間追求し続けてきた学校間対抗スポーツの統制をついに成功させた。

Epilogue

こうして現在に続く高校運動部活動の基本的な管理構造ができあがった。1930年代以降の流れを素描しておく、高校はプログラムを拡大し、より多くの生徒が高校スポーツに参加するようになり、競技レベルも向上していった。大都市では中心地域の荒廃とともに学校とスポーツが凋落し、高校運動部活動は郊外で相対的に盛んになった。地方では、地元大学でアメリカンフットボールが行われなくなったり、アマチュアクラブも消えていったりする中で、多くのスポーツファンは高校運動部活動の活躍に熱狂した。時代ごとの特徴をいくつか挙げると、1950年代と1960年代には、若者の反逆や生徒の非行が社会問題になる中で、運動部活動は社会的向上や人格形成の手段と見なされ、推奨された。1970年代には、タイトルIXの制定により女子スポーツが隆盛した。1972年の教育法改正によって性差別を禁止したタイトルIXが制定され、これによって州立高校は女子が参加できるスポーツ大会とその機会を急速に拡大させた。

1980年代になると、商業主義が再び進んだ。とくにバスケットボールでは、スポーツ関連企業が競い合うように、シューズ・ユニフォーム・道具を秀でた高校チームに提供し、高校運動部活動と企業の結び付きが強まっていった。そうした動向は勝利至上主義を推進させ、ドーピング問題が高校運動部活動にも押し寄せることになった。

寸評

本書は、アメリカの高校運動部活動の歴史的展開を知るための貴重な研究である。まず評価すべきは、豊富な資料にもとづいた丁寧な実証主義的な記述が成し遂げられていることである。シカゴ市とイリノイ州に焦点を絞っているため、範囲の限界は当然あるが、政府文書から地元新聞記事、学校誌まで網羅的な資料収集が行われており、それらを十分に活用した丁寧な実証的研究であるといえる。

それに加えて、分析枠組みが明確であり、アメリカの高校運動部活動の歴史理解を大いに前進させてくれる。タイトルにも使われた「統制の追求」(the Search for Control)が、本書を貫く理論的パースペクティブであり、それを下にした3つの時期区分によって、高校運動部活動が生徒による自発的な誕生から教師による教育的な統制が敷かれるまでのプロセスを理解することができる。

本書から示唆される発展的な課題を3つ指摘しておこう。第1に、アメリカの運動部活動の歴史をさらに掘り下げるためには、シカゴ市とイリノイ州以外の事例分析を積み重ねることが課題となるだろう。広大なアメリカにある地域差を検討することができれば、アメリカの運動部活動の歴史的全体像がより明瞭に浮かび上がってくるかもしれない。

第2に、それにも関連して、本書 Epilogue で素描された1930年代から現在までの流れをより詳細に跡づけることも課題として挙げられる。本書ではすでに、1950年代・1960年代の非行問題、1970年代のジェンダー問題、1980年代以降の商

業主義問題の論点が提示されているので、これらを深く掘り下げる必要があるだろう。

第3に、やや外在的にはなるが、本書を基盤にして、運動部活動の国際的な比較史研究の筋道も開くようにも思われる。具体的には、アメリカのモデルになったイギリスとの比較、アメリカをモデルにした日本との比較などが構想できる。各国の運動部活動の比較史的検討を通じて、スポーツと教育の関係のあり方の多様性やそれを生み出す背景を考察することができるかもしれない。

[Robert Pruter, *The Rise of American High School Sports and the Search for Control, 1880-1930*, Syracuse University Press, p.417, 2014]

